高等学校　第１学年　総合的な探究の時間　学習指導案

奈良教育大学　英語教育専修　福西　隆生

１．単元名　「物語を世界と未来につなぐ」

２．単元の目標

・自分に必要な資料を自ら探し出し、その資料を正しく使用できている。　（知識・技能）

・日本語と英語、それぞれの言語知識を用いて人に読んでもらえる作品を作ることができる。

（思考・判断・表現）

・思いついた様々なアイデアを聞き手に伝わりやすいよう発表できる。人のアイデアや意見を基に、改善案を提示しようとする。　（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（１）教材観

この単元では教科書を用いず、授業においてもほとんど扱われることのない児童文学作品に焦点を当てた取り組みとなる。より生徒の日常と個人に根差したものを教材として扱うことで、彼らにとって英語を中心とした言語が身近なものであることを感じてもらいたい。同時に、生徒の図書館の利用率が低く、生徒の読書率も低い昨今、物語に触れる機会が少なくなっている。読んだことのない読書教材ではなく、幼少期に触れた物語を読み返すことで、生徒自身の経験と記憶を生かした授業にしたい。

（２）生徒観（想定）

本クラスの生徒は英語における能力差が大きい。英語が得意なものの中にも能力差があり、Reading が得意でも Speaking が苦手なものやその逆もまた然りだ。グループ交流の機会を設けることで、それぞれの得意分野を生かす機会とする。同時に、各人の苦手な分野を補い合うことで英語への苦手意識を軽減させることを図る。個人の能力計測のためとはいえ、教養科目としての英語科の授業では協力作業を行いにくい。よってこの活動を通じてクラス内の交流や誰かの役に立つことで生まれる自己有用感を養う。

（３）指導観

本単元の指導にあたっては、普段の授業でどうしても確保できない教科学習中の協同的学習活動を十分に行いたい。特に英語について、各言語能力はもちろん、言語運用に関する能力差が生徒間で顕著に表れている。生徒が自分の知っている内容に影響されて参考資料を無視した訳を作ること、ただ翻訳ツールに頼り切った訳を作ることは避けたいため、指導においては言葉を用いる理由付けを重視したい。

今回の学習は翻訳活動とその活用に重点を置いて行う。今後は翻訳活動が文化活動にどのような影響を与えるのかを考え、継承について取り扱う予定である。

（４）ＥＳＤとの関連

〇本学習で働かせるＥＳＤの視点（見方・考え方）

・有限性…物語や言葉は知ってもらわなければ消えてしまう。

◎公平性…世界中の人が同じものを楽しめる権利、言葉の壁を超えた物語の良さを伝えられる。Google翻訳でもできない、言葉の壁にぶち当たってみる。

・連携性…相互に協力し、自国または海外の物語を人に伝える。

・責任性…物語に隠れた想い・文化を尊重して伝える。

・多様性…発表を通じて生徒毎に物語の多様性を知る。

〇本学習で育てたいＥＳＤの資質・能力

・批判的に考える力(Critical Thinking)

まずは自分の知っている昔ばなしを新たに調べ、他人の知っている内容と比べることで、自分の持っている知識・見聞がすべてではないことを知る。

・多面的、総合的に考える力(Systems Thinking)

昔の日本語、または外国語で考えられた物語がどのようなことを表そうとしてその言葉を使ったのか、どのような考え方を基にして、物語を通して何を伝えようとしているのかを翻訳を通じて考える。

・他者と協力する態度

自国語の要素だけでも理解することは大変難しいので、班での作業を分担すること、または全員で協力することでその負担を軽減し、互いの考えを理解しようとし、相互に取り入れようとする姿勢をもつ。

・つながりを尊重する態度

昔の日本語または外国語と、現代の日本語のつながりや文化・考え方の相違と類似点など、考えられる要素は多くある。それらの要素をひとつでも深く掘り下げて研究することで文学への理解を深める。

・コミュニケーション：協同的問題解決能力

相互に協力することで様々な意見を通じ、問題に取り組むことができる。

〇本学習で変容を促すＥＳＤの価値観

・世代間の公正

日本の文化を次世代や海外の文化に伝え、知ってもらう。

・世代内の公正

翻訳することによってその国の文化を海外へと発信することができる。

・人権・文化を尊重する

物語を尊重した翻訳・変更などについて、柔軟に考え対応することができる。

・幸福感に敏感になる

物語に触れることで得られる喜び・幸せに触れる。

〇達成が期待されるＳＤＧｓ

４：教育

10：不平等解消

16：平和と公正

17：グローバル・パートナーシップ

４．単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
①資料に根差した知識を理解している。 ②資料を運用し、得た知識をまとめることができる。	①資料をもとに自分だけの和訳・英訳を生み出すことができる ②翻訳活動を通じて言語運用の難しさを知るとともに、友人の意見や資料を用いて解決へと導くことができる。 ③物語の継承について、自分の意見を述べるだけでなく、友人の意見と比較した考察ができる。	①翻訳作成の際、友人と共同して作成に取り組み、得た意見や感想をメモに残している。 ②制作物の活用について、自分の意見を述べるだけでなく、友人の意見と比較した考察を書いている。

５．単元の指導計画（全 12 時間（1 学期）・総合）

時数	主な学習活動	学習への支援	評価（△）
1	導入 「物語」(童話・昔ばなしについての思い出を語らせる。 ・人々に物語を知ってもらうにはどうすればよいか？	・生徒の思い出や興味を引き出す聞き手に徹する。 ・思いつかなかった生徒やこれからの活動のため、教師が作成した例示を行う。(『かぐや姫』の英訳・竹取物語の活用)	△ウ②
2－3	調べ学習 「人に正しく伝わる翻訳を作るには何をすればよいのだろうか？」	・適切な資料を引用しているかチェックする。	△ア① △ア②
4－5	翻訳作成・発表準備 ・物語の好きなシーン・ページを一つ選び、その箇所を翻訳する。 ・適宜資料を使うほか、友人と交流して必要に応じて意見を取り入れる。	・適宜生徒の作成物をチェックし、言葉選びの理由を述べさせ、思考を整理する手助けを行う。 ・できた生徒から引用箇所とその対訳を提出させ、冊子にして事前配布する。	△イ② △ウ①
6－7	発表・交流 PowerPoint もしくは口頭と資料による発表 (事前配布の冊子の補足・言葉選びの理由など)	・生徒から発表者に質問や意見が出なかった場合、教員から疑問やヒントを投げかける。	△イ①
8	意見交流・発表準備 制作した翻訳文を誰に向けてどう伝えるか考える。	・生徒同士でディスカッションできるよう場を整える。 (グループ活動・全体発表・メンバーを変えてのグループ活動の流れ)	△ウ②
9－10	制作物を活用したイベントの準備活動 (例：図書館読み聞かせ・展示、留学生との交流会)	・生徒から出たアイデアを基に、要望のあった交流箇所との打ち合わせの場を設ける。 ・授業時間とイベントの実施が合わない生徒がいた場合はそのイベントの運営・引率を行う。	
11	制作物を活用したイベント実施		
12	イベントの振り返り活動	・活動報告書を作成させる	

		・生徒から活動の継続要望があった場合、授業責任者として支援を行う。	

制作物活用→誰に伝えるかを考えて発表の場を設ける。（留学生・町の人・小学生など）
小学生対象なら外国語活動の一環にできるかも（小５・６は教科になるので厳しい？）
地元の図書館で読み聞かせイベントに交じって劇を披露

物語の翻訳→かぐや姫：日本原産→英語に
海外産→日本語に？（原本扱うのが難しければ日本語→英語）

今後の展開で文化継承について取り扱うことを指導観で触れる